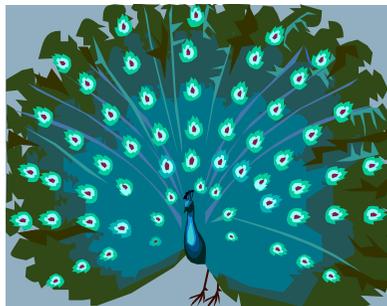
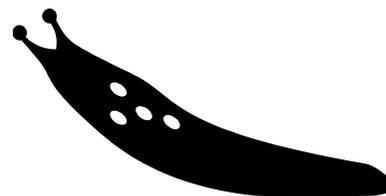


く

じ



VS



作者さんや読み手さんの声は
<http://www.columnland.net/> にてどうぞ

くじらの夢

くじらは夢をみてました。

遠い昔の青い海

彼のひいひいおじいちゃん
のんびり海を漂って

途中で幾多の小魚を

食べては海を泳いでた。

視界をさえぎるものはない

たとえば無数の漁船たち

たとえば軍艦潜水艦

そんなものなどつゆ知らず

うれしそうに泳いでた。

くじらは夢をみてました。

はるか未来の黒い海

彼のひ孫のそのまたひ孫
ゆらゆら海をさまよって

やつとの思いで小魚探し

必死の思いで生きていた。

周りはどこもごみだらけ

時には釣り糸釣り針

はたまた空き缶ゴミ袋

えさと間違ひ飲み込んで

苦しみながら泳いでた。

目が覚めくじらは考える。

いつになったら来るのだろう。

邪魔なものなど何もなく

のびのび海を泳ぐ日が。

いつになったら来るのだろう

人間のゴミにおびえつつ

こわごわ海を泳ぐ日が。

所詮相手は人間で

自分がかたう相手じゃない。

できることは祈ること

想いが届くと信じつつ

今日も優雅に泳いでる。

クジヤクのオスとメスは同じ種類でも、全然違う。オスは華やかで、メスは地味だ。私を例えれば、クジヤクのメスだったのかなあ。

私の名前はヒロ。私にはユウっていう双子の妹がいる。双子って言っても、全然似てなくて。いわゆる二卵性ってやつだ。容姿も違えば、性格も違う。

ユウは、何でもそつなくこなす子で、かわいい子だった。それに対して私は、不器用で、地味な子だった。私たち二人にはいつも同じ『機会』が与えられた。それはそうだ。同じ学校に通い、同じ家に住み、習い事だって同じことをしていたんだから。そのなかのほとんどのことにおいてユウの方が、優れていた。私はできない、というわけではなかったと思う。ただ私が頑張れば頑張るほど、引き立て役にしかならなかった。ユウが周りの人にすごいすごいとほめられると、私は嫉妬した。

ある日、家におばさんがやってきた。おばさんは、うちのおじいちゃんからいろいろと孫の話聞いたようで、居間にいたユウに話しかけていた。

「あらあ、ユウちゃん、こんにちは。このまえの陸上大会の百メートル走で一位とったんだって？しかも大会新記録で。」

ユウが得意げに答える。

「これで二年連続なんだよ、大会新記録で一位とるの。」

「まあ、すごいわねえ。ユウちゃんは足の速いお父さんに似たのねえ。ヒロちゃんよりユウちゃんの方が足が速いのよね。今度ロシアで開かれる交流試合にも出るんだって？」

おばさんはにこにこ顔で言う。

私はとなりの台所で、おばさんの高らかな声を聞いていた。ユウがほめられているのを知っているのが苦しくなると、自分の部屋に行こうとした。そしたら、ちょうど良くおばさんが今から出てきて、

「あらあ、ヒロちゃんお久しぶり。ヒロちゃんこのまえの陸上大会の百メートル走位だったんだって？」

おばさんの方を向かずに、すこし間をおいて私は答えた。

「ううん、5位だった。」

私とユウは、いい比較対象だった。普通なら兄弟がいても年齢が違ったり、やるこゝとが違ったりして、別の『舞台』にいるものだ。だけど、私たちはほとんどまったく同じ生活を、同じ時期に生きて、同じ枠組みの中で評価をうけていたから、それはある意味仕方のないことだった。

でも、私とユウとを一番比較していたのは周りの人ではなく、他でもないこの私だったんだと最近気づいた。

ひこうき雲に想いをのせて

人生とはくじのようなものだ。私のおばあちゃんほどくそう言った。運のいいものはよき道をひきあて、運のないものは地獄を味わう。

じゃあ、私はどうなんだろう。だからだと過ぎゆく時間の中、日常というぬるま湯の中に輪郭さえも溶けていきそうになる。怠惰でなんの変哲もない日々。

「田舎の学校なんて嫌いよ……」

窓際の自分の席で机につぶつぶしてそうつぶやく。ごおりとたがまるセーラー服の襟が少し苦しいが、顔をあげる気にはならない。クラスの女の子たちのきゃあきゃあという笑い声を遠くに聞きながらそつと目を閉じたとき、かしやんと窓枠が音をたてた。

ああ、まただ。

私は目線だけを前へと向ける。前の席ではあきららが体を横に向け、座ったまま窓枠にほおづえをついていた。彼が窓枠にほおづえをつくとき、いつも学ランのボタンがぶつかって音をたてる。

かしやん。

「また見てるの」

私の問いかけにあきららがこちらを向いた。

「なんだ、寝てるのかと思った」

「別に。ただ、つぶつぶしてただけよ」

そう言っつぶつぶすと、彼はくすりとほほえんだ。

「なあ、ゆき」

「なによ」

あきららの声に私は顔をあげる。彼は私の方を見てからゆつくりと空をゆびさした。

「あのひこうき雲、どこに行くんたろうな」

さしている方を見やると、青い空に白い雲がひとすじ、すつと西の方へ流れ去るところだった。私はその行く先をながめてから、つまずで軽くあきららの椅子を蹴飛ばした。

「まったく、本当にひこうき雲が好きね」

「だって、あれがどこへ行くのか気になるじゃないか」

あきららは照れくさそうに笑って、また空を見上げた。

ひこうき雲が風に流されてゆつくりと空に溶けた。

私がこの高校に来たのは、半年前。父さんの転勤でのことだった。父さんの会社が田舎に土地を買って工場を作ることになり、父さんがその責任者に抜擢されたのだ。私はこんな田舎町、本当は来たくなかったが、父さんに

説得されて渋々転校した。転校初日、好奇の目にさらされ、不満が蓄積されつつあったそのとき、私はあきららに出会った。周りを田畑に取り囲まれた、このさびれた高校であきららだけが周りと違つて見えた。洗練された動き。もの静かな話し方。この田舎町を嫌っている私にとって、あきららは憧れ以外のなにもでもなかった。

彼は気がつくとき、よく窓の外をながめていた。いや、正確にはひこうき雲を。

かしやん。

彼のボタンがそう歌うたびに私は彼の目線の先を追つた。澄んだ青い空に走る白いすじをながめるたびに、私は溶けていきそうになった自分の輪郭を取り戻せるような気がした。

私は知っていた。あきららがひこうき雲をながめる理由を。そして、私の淡い恋心が叶うことがないことも。

かしやん。

ある日、私はたずねてみたのだ。彼がいつものように空をながめたとき、その理由を。

「僕の好きな人は、ひこうきに乗って、遠くに行つてしまったんだ」

聞かぬやよかつた、と思つた。聞いてしまわなければ、知らずにすんだ。

私の顔を見て、彼はそつとほほえんだ。そうして、またほおづえをつく。

かしやん。

おそらく、彼は知っていたのだ。私の秘めた恋心を。大切にしまっているこの気持ち。それでいて、否定することも拒絶することもせずに、断つたのだ。

彼はまた空をながめる。私も彼のボタンが歌うたび、同じ方角を見る。彼と同じように。ひこうき雲に思いをのせて。

「また、見てるの」

あきららがゆつくりとほほえむ。

叶うことのないこの想い。

だけど、たとえ、あきららが私に振り向かなくても、今こうしてあきららと一緒にひこうき雲をながめることができ、私は幸せなのかもしれない。

人生とはくじのようなものだ。

じゃあ、私のはどうだろう。叶うことのない、だが、胸に満ちたこの淡い想いは。

(はずれ？あたり？)

かしやん。

窓の外をひこうき雲がゆつくりと流れた。

——20XX年、遺伝子操作技術の急速な発展により、傲慢な人間たちはあらゆる生物をま
るでおもちゃのように「改造」し、その結果地球上にはへんてこな動物たちが溢れていた。そして今、
身勝手な「改造」の魔の手がある鳥類にも——

ある商品広告

【商品番号】 584-B1114

【名称】「くじ役(クジヤク)ちゃん」

【特徴】

長らく単に美的要素しかもたなかったクジヤクの羽に、ついに実用的な要素を投入！羽にある美しい円形部分を「インなどの硬いものでこすると、まるでスクラッチくじのように表面がはがれ、下に文字が現れます！

ほとんどの羽には「残念」としか書いてありませんが、突然変異的に「当」と書いてあるものが存在するので、さまざまなしチュエーションで使えるスクラッチくじとしてご利用いただけます。

さも「くじ引いて下さい」と言わんばかりの尾羽をバサツと開いたクジヤクおなじみのポーズも、あなたの快適なスクラッチくじライフをサポートしてくれるはずです。

また、羽を抜くたびにクジヤク独特の猫のような声で「イヤーン、イヤーン」と鳴きますので、ちょっとさっ気のある方笑にはきっこ満足いただけるかと思われまます。

さらに今回は皆様のご要望にお応えして「残念」、「当」の『ノーマルタイプ』ほかに、「当」の代わりに「オニ」と書いてある『おにっこ』、かくれんぼタイプ、『王様』と書いてある『王様ゲームタイプ』もご利用させていただきましたので、どうぞご利用ください！

当選確率100%

バレンタインデー当日。

用意したブツは2種類。

1つはわざわざ専門店まで行って選び抜いた素材で手間暇かけて作り上げたチョコプレート。もう芸術品の域入ってます。材料費だけで3000円。誰がどう見たって本命チョコ。もう1つは…

「私の気持ち、受け取ってくれる？」

「嫌だって！それ赤いじゃん！もうチョコの色じゃないじゃん！」

「いいから早く食え！あーんしてやるから！」

今年はバネロを混ぜてみました。そう、毎年恒例恐怖のロシアンルーレット。女の子からの愛のこもったプレゼント受け取れないなんてないよね？のコンセプトのもと行われる、いわゆる無差別テロです。ちなみに当たる確率は50%。見た目だけじゃ全く区別は付かない。だけど君のだけは誰が見たってばれる仕様。なんたって愛の量が致死量超えるからどう工夫しても隠しきれないんだ。あ、泣いてる。愛こめすぎたかな？

君の事が好きだから渡すんじゃない。

君がそうやってのたうち回ればみんな腹かかえて笑うじゃない？クラスに笑いを提供するために渡してる。そんなことお互い分かってるよね？

そうして君は

「結局今年も1個貰えなかった…誰か俺のことを愛してくれる女の子はいないのか！」

そうして私は

「何いってんの！せっかく私が愛をたっぷりこめたチョコあげたじゃない！」

「お前がこめたのは愛じゃなくてバネロだろ！」いつも通りの軽口の応酬。

この日の帰りの電車の中では毎年繰り返されてる予定調和。

「じゃ明日。」

「おう。」

私の方が一駅先に降りる。

結局靴の中に残ったコイン。いつも通り。

渡してしまったら、こんな関係が終わってしまいかもしれない。渡せるわけがない。

この後出番のなかった本命チョコを駅のゴミ箱に捨てようとして思いどまり、家で部下から貰えなくてしょぼんとしているお父さんにあげるのもホワイトデーにお父さんから10倍返しを貰うのも君から『ホワイトデーだし俺からも愛を返すよ』の言葉とともにワサビを詰めたい棒(チョココーティング)とかを貰って、ワサビの強烈な匂いのそれを気付かないふりで一口食べてから思いっきりぶん殴ってクラスに笑いが起きるのも飽きもせず毎年毎年繰り返している予定調和。

ホワイトデー当日。

まだ口の中がヒリヒリする。納豆チョコと思わせて中に大量のカラシ。あいつも知恵が付いたか。

飲み物を買いに近所のスーパーへ行くと、偶然君のお母さんにあっただ。

その面白い物かこの中身から察するに今日の晩御飯は君の好物のすき焼きかな？

「あの子ったら毎年ホワイトデーには凝った手作りのチョコを私にくれるのよ。この年でもやっぱり嬉しいもんでちょっと夕飯が豪華になっちゃうのよね。」

まあ男の子だし恥ずかしいのかいつも『これ、学校で貰ったやつ。俺、甘いのが嫌だから。』とか言うんだけど夜中こっそりチョコ作ってるのはバレバレなのよねー

もしかして…まさかね？

でも、賭けてみる価値はあるかもしれない。

あたりか。はずれか。

お父さんごめんなさい。

来年はチョコないかも。

和解

ドカーン！

「はーはっはっは、この世界は俺様のもんだ。」

怪人ナメクジが繁華街Aに現れた。あたりに煙が立ち込め、人々が悲鳴を上げて逃げ惑う。しかしその時、一人の男が颯爽と走ってきて叫んだ。

「ごらー怪人ナメクジめ覚悟しろ。私は正義の味方、味噌ブーメン勘太郎。あだ名はジョージ。」

このヒーローの登場に人々が歓喜の声をあげた。ナメクジが言った。

「はーはっはっは。俺様に歯向かうとは良い度胸だ。食らえ。『くじ』と言ったら『くじ』と言ってしまう、くじ8光線ー」

ナメクジは触覚から光線を発射し、光線はジョージの鳩尾に直撃した。が、特に何も起きなかった。ジョージは鼻で笑って言った。

「ジョ。こんなへぼ光線痛くも痒くもない。次は俺のターンだ。覚悟しろ、ナメクジ——『くじ』と言ったら『くじ』と言ったら『くじ』と言ったら『くじ』……」

「『くじ』と言った途端、彼の口から機関銃の音が『くじ』という言葉が飛び出した。ナメクジはその途端、ビデオカメラを手に持って言った。

「はーはっはっは。『くじ』と言ってしまったな。これで貴様は死ぬまで『くじ』と言っ事になる。そして、俺様は『のヒーローの醜態をユーチューブに投稿し、この世の恥をひしにしてやる。』」

ジョージは事の重大さを悟ると『くじ』と連呼しながら繁華街の小路に逃げ込んだ。ナメクジがそれを追う。入り組んだ小路で世間体を懸けた鬼『じ』が始まった。ジョージは逃亡の最中、この窮地を脱するため知恵を絞った。

くじ8は言った。みれば発散する級数である。しかし、あまのむねのほんだ早い。かの大数学者オニール・オニールは発散級数 $1+2+3+\dots+n-1/12$ の n を発見した。はなないか。なまは、くじ8も解決する。はなすだ。発見に不可欠なのは入念な観察である。くじ8を観察してオニールが。……伊能くじ8を観察してオニールが。……伊能くじ8が考えた。……

※伊能……深く恥じる。……

ジョージは自分の閃きに感激し、地面をのた打ち回った。しかし、背後からナメクジの声が響く。

「立て。鬼ごっこは終わりだ。」

ナメクジがビデオカメラを構えて立っていた。

「終点が無人の小路とは上出来じゃないか。ここへ来い。それとも、その醜態で俺様と勝負するかね。」

ジョージがふと足元を見ると、見よ、誰かが捨てた大凶くじが落ちていないか。彼は伊能の思いでくじを拾い上げ、口に放り込んだ。それと同時にビデオカメラの録画ボタンが押される。だが、もはやジョージは『くじ』と言っていない。口唇は疲労で激しく震動していたが、ジョージは毅然として立ち上がって言った。

「はへふひはほう。おはほひはほほはへは……フン」

彼は自分の発音に自分で吹いた。しばし笑うと、学生時代に鍛えた腹話術でまた言い直した。

「ナメクジ野郎。このカタツムリの出来損ないめ。正々堂々と勝負しろ。私は逃げも隠れもしないぞー」

ところが、ナメクジは突然しくしくと泣き始めた。

「そりさ。ナメクジは殻がないだけで皆から嫌われるのさ。カタツムリとほとんど変わらないのに……殻がないだけで……カタツムリの野郎……ううううう」

ナメクジは子供のようにひびきをかかえて泣いてしまった。ジョージは彼を哀れに思い、傍まで行ってしゃがみ、肩に手を置いて言った。

「すまない。私も言い過ぎた。いやむしろ君は『♪もともと特別なオニールワン』さ。元氣を出せ。」

「Oh My Friends!!」

二人の男は互いに肩を抱き合って泣いた。周りには人々が集まり、拍手をもつて彼らを囲んでいた。雲が割れ、その隙間から差し込む一筋の光が彼らを照らした。暖かな拍手と柔らかな光の輝きの中彼らはおいおいと泣いた。……うって彼らは和解したのであった。

めでたしめでたし。

特等席

人間の運はプライマイゼロになる、という話を聞いたことがあるが、きつと嘘だ。今までの生涯でおみくじの最高結果は末吉だし、福引きなんてティッシュがタダで貰えるだけのイベントだ。それに、何より―

「なんでこの家に生まれたんだろう…」

「しかたないだろ、由香。父さんも母さんも仕事で忙しいんだから。面倒なのは分かるけど、」

「兄さん、独り言にいちいち突っ込まないでくださいませんか？」

この、乙女心の分からないアンポンタンと、『兄妹』だということだ。

ああ、もう、四親等さえ離れていけば既成事実なんなり作ってしまつてどーにでもするのに。

「…なんか、最近よそよそしくないか？」

「心配してくれるのは迷惑なほど有り難いですが、兄さんには関係ありませんので。」

以前の距離では兄妹でいれる自信がないからです。察しろ鈍感。世界には幾らでも親がいるのに、なんでこんな、好きな人と絶対に結ばれない位置に生まれたのだろう。

「俺に関係が無くても、悩み事があるなら、相談してくれないか？」

「今日は、やけに聞いてきますね」

やつぱり、心配してくれてるんだ。

「あたりまえだろ、大事な妹なんだから。」

…どーせそういうオチですよ。まあいいや

「なら、聞きますが。今まで恋愛対象じゃなかった相手が、対象になつてしまつたら。兄さんならどうしますか？」

「好きならそれで良いじゃないか。俺には恋愛対象じゃないつて概念が分からないけれど、今まで眼中に無かつたからつて、思い留まることはないだろう。」

あ、なんか今の昔ついた。そもそも私だけこんな気まずい気分でないきやいけない理由はないんだ。

「そうですか…にぃさん、ちょっとこつち来てくれませんか？」

確実に突き飛ばされるだろうが、今の苦しさが悲しさに変わるだけだ。そう思い、抱きしめる。…一秒、二秒、三秒 …あれ？

今年のおみくじも、大凶だった。それはそうだ。生まれたときに、大好きな人と一生一緒の特等席を引き当てたのだから―

遅刻少女アオイ

テスト開始時刻・・・9時00分
 現在時刻・・・8時30分
 現在地・・・ベッドの上！

石川アオイ、17歳。ごく普通の高校生である。毎日のように寝坊（主に二度寝が原因）しては学校に遅刻しているのだが、今日は自身の留年が懸かった期末試験。遅刻の許されない立場である彼女はベッドから飛び起きるや否や、目にも止まらぬ速さで制服に着替えて階段を駆け降りた。

母が「朝ごはんはどうするの？」と言っていたような気がしたが、勿論そんな猶予は無い。食卓に置いてあった食パンを1枚取り、口に咥えて家を飛び出した。

試練その巻 フラグクラッシュ

食パンを咥えて走っているとか曲がり角で転校生とぶつかってしまうものである。これはマーフィーの法則により実証されている「回避不可能フラグ」であると考えられていたが、彼女は転校生が曲がり角で待ち伏せしているようが関係無い回避方法を思いついた。

「原因は曲がり角の視界の悪さ！よってこの壁を、破壊する！ラピス・スブラッシュ！」

彼女の右手から発せられた藍色のエネルギー弾は壁を貫通し、二十メートル先の民家までも粉碎した。しかし偶然壁の近くを通りかかった転校生らしき男子生徒には間一髪で当たっていなかった。

「チッ、逃したか。」
 「かてね。家にかえりまんぼ。」
 こうして第一の試練を突破したアオイは駅に向かって全速力で走り去っていった。

現在時刻・・・8時35分
 現在地・・・自宅へ駅道中

試練その巻 溝の口の激闘

駅に到着した彼女を待っていたのは発車寸前の「田園都市線渋谷行き快速」であった。ここまで休む事無く走り続けてきた彼女は最期の力を振り絞り、電車に駆け込もうとした。しかし非常に何者かが彼女の行く先を阻止したのであった。

「駆け込み乗車、ダメゼッタイ！」
 「そのボイスは・・・駅員1号！」

駅員1号、田園都市線の沿線に5人しかいないと言われている「東急真拳」の使い手である。この類い稀なる能力者が何故ここでアルバイトをしているのかは不明だが、彼がアオイの前に立ち塞がっているという事は紛れもない事実であった。

「どうしても乗車したいと言うのなら・・・俺を倒してからにするんだな。」
 「アルバイト駅員如きが私に敵うとでも？」

強がってはみたものの、2人の実力差は歴然であった。切り札のなんとかスブラッシュを軽々と避けられ、アオイは駅員1号のラッシュ攻撃を喰らった。

「東急パンチ！ 東急キック！ 東急ジャーマンスープレックス！ 東急百裂拳！ キッしてこれが東急真拳奥義・・・」

抑え込み。

「な、何と言うか・・・地味うわらばっ！」
 しかし一本は一本である。素直に負けを認めたアオイは溝の口駅を去っていった。この間、電車が3本くらい来ていたが彼女は全く気付いていなかった。

現在時刻・・・8時45分
 現在地・・・溝の口駅前

試練その巻 運転手の失策

アオイは仕方なく駅前に止まっていたタクシーに乗り込んだ。残り15分、電車が使えない以上この手段しか無いと彼女は判断したのである。

「大岡山駅までお願いします。急いで下さい。」
 運転手はどう考えても遠回りしていたが、これがグーグル先生の出した答えだ！と言っばかりで人の話を聞かなかつたので、なんたらスブラッシュをお見舞いしたら静かになった。試してみるものだ。

しかし、通勤時間帯なので予想はしていたが環七通りが渋滞であった。グーグル先生のルート・乗換案内に従ってばかりの運転手を、彼女は憤りを通り越して哀れに思い始めた。この状況下、彼女の目に映ったのは空いている歩道だった。

「ここで降りして下さい、このヘタレ運転手。」
 さちんと料金も支払い、アオイは歩道に降りた。「歩道が空いているではないか。行け。」と言わない辺りが彼女の精一杯の良心であった。

現在時刻・・・8時55分！
 現在地・・・環七通り

残り5分、全速力で走ったとしても高校には到底辿り着かない距離だった。しかし彼女はたった1つの打開策を持っていたのだ。

アオイが小声で詠唱を始めると、突如暗雲が立ち込めてきた。この原因に気づいたのは彼女の真の能力を知っている人物、駅員1号だけであった。

「つ、遂にあの能力が発現してしまうのか・・・ゴクリンチョ。」
 彼女は鞆から携帯電話を徐に取り出すと、同じクラスにいる双子の姉・ミドリに電話を掛けた。

「もしもし、お姉ちゃん？ 今日遅刻するから私の答案も作っておいてー。」

「もちろん却下です」

石川アオイ、留年決定。

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
01	くじらの夢	まじょコメント 17 pt 1 位 0 sp		
02	Comparison	0 pt 8 位 1 sp		
03	ひこうき雲に想いをのせて	15 pt 2 位 1 sp		
04	ある商品広告	4 pt 5 位 3 sp		

ゆったりと広がりのある風景。昔、未来、それを「夢」でつないで、今の漂う思いへと形もきれいに決まって今週の表紙です。
そのまま、ずっと入って、なごんでもらえて、みごと首位でした。ゼロ点の「夢」までごらんになったという、とてもういういしい作者さん、おめでとう!!

うざいおばさんキャラが、しっかり立ち上がってて、でもその分、せっかくのヒロの思いが印象薄まってしまった感。
特に、一番気にしていたのは自分、というラストの一行をもう少し展開したかった。
実話です、と作者さんが語り出したとたん、フロアの空気が変わりましたね。一文一文の背後にこめられた作者さんの思い、あらためて受けとっていただければ幸いです。
特別賞：タイムトリップ賞 by あみだくじ班（「今」から出てきたおばさん）

かしゃん。音が耳に残ります。恋愛未満の淡い恋心、ずっと心に溶けてゆくような。
とても自然でこちよ表現の連なりでした。作風チェンジの作者さま、華麗にシルバー・メダルです、拍手！
特別賞：か賞 by 時班（かしゃん、ぜひ実演を!!）

		<p>「イヤーン、イヤーン」と泣かせてみたい！　そこが私にとってはツボでした(だめ?)。</p> <p>ちょっとした文明批評としても読んで、ナイス着眼。</p> <p>特別賞：200X賞 by Suekichi班(時代の流れをかんじます) / 不良賞品 by 末吉班(突然変異で「当」って確率低ッ!!) / ベストセラー賞 by WHITE DAY WASABI CHOCO(売れると思う)</p> <p>イチオシフレーズ：「クジ役ちゃん」</p>
05	当選確率100%	<p>7 pt 4 位 0 sp</p> <p>わあ。しあわせ色のストーリーが、とてもこちよい。</p> <p>ハバネロにワサビと大騒ぎを演じたあとに、お母さんのおしゃべりで真相に気づかせるというテクニックが、さりげなくて良いですね。学園モノの王道といったところでしょうか。</p>
06	和解	<p>2 pt 6 位 2 sp</p> <p>疾走感MAX。すばらしいノリです。言葉あそびも理系ネタもしっかり入って、ラストの泣かせる展開といい、いいなあ、こういうの。</p> <p>特別賞：塩胡賞 by Q班(なめくじと言えば塩!) / 賞`ジ(ジョージ) by U-tube班(味噌ラーメン勘太郎)</p> <p>イチオシフレーズ：「立て。鬼ごっこは終わりだ。」</p>
07	特等席	<p>2 pt 6 位 2 sp</p> <p>どろどろなお話のところ、ちょっといいいなセリフづかいが、それを救っているな、と読みました。それにしても、どうしてみんなこういうの好きなのん?</p> <p>特別賞：もうよしま賞 by 当たり?はずれ?班 / 恋愛大賞 by あたりはずれ2 叉路班(妹かわいいよ妹)</p> <p>イチオシフレーズ：「あんぽんたん」「...一秒、二秒、三秒 ...あれ?」</p>
		<p>13 pt 3 位 1 sp</p>

転校生フラグに東急駅員。はじけるスピード感でぐいぐい引きずっていってくれます。さすがに、タクシーに乗った頃に息切れしてしまったか。アオイちゃん、もっともっと暴れてほしかったような。

それでも無敵の「快速」ぶりにて、田園都市線論議に、今年の名前論議（by女子大班）まで巻き起こし、みごとブロンズ・メダルとイチオシフリーズ大賞ゲットです。おめでとう!! コールの瞬間、「やっぱり」と言ってもらえるようになったら、一人前ですよ、作者さん。

特別賞：東急賞龍拳 by No Rapid班
イチオシフリーズ：「現在地・・・ベッドの上!」「東急パンチ!東急キック...」「歩道が空いているではないか。行け」×2 「Lapis Sprash!」「なんたらスプラッシュ」